

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

がん研有明病院大腸外科研修を終えて

鹿児島大学消化器・乳腺甲状腺外科

田辺 寛

期間：平成30年8月27日～9月21日

研修場所：がん研有明病院 消化器センター 大腸外科

この度、日本臨床外科学会国内外科研修に応募しがん研有明病院での研修の機会を得ることができました。当施設は大腸外科領域において言わずと知れた日本最大のハイボリュームセンターであり、年間700例以上の大腸直腸癌手術症例があり、約95%が腹腔鏡手術であります。多くのエキスパート外科医、多くの高いモチベーションを持ったレジデントが集まる先進的かつアクティブな施設です。私は普段鹿児島大学病院で大腸グループに所属し手術、化学療法に従事しております。学会や手術ビデオ、文献で日常診療の合間に勉強しておりますが、実際に見て肌で感じて得るものは大きいという先輩方の教えを守り可能な限り手術見学に行くよう努めて参りました。今回のがん研有明病院での研修は願ってもない好機でありました。

がん研有明病院大腸外科はスタッフ8名、レジデント11名で研修期間中、手術件数95件 / 4週間、入院患者常時約70名という状況でした。研修内容は朝夕のレジデント病棟回診、各カンファレンスへの参加、手術見学が主でした。夜のセミナーや実習にも参加させていただきました。火曜日木曜日朝の消化器カンファレンスでは数多くの手術症例を各グループのレジデントがプレゼンし、要点が議論されておりました。術前は1～3分程度の英語で簡潔にまとめられており、必要であれば施設でのデータ、参考文献も提示されておりました。術後報告も手術記録、病理結果が簡潔にサマライズされ、テンポの良いハイボリュームセンターの徹底した合理的なカンファレンスを垣間見ることができました。ただ、問題症例や緊急手術後の提示となると外科医の血が騒ぐのか様々な先生が次々に発言され、とても活気に溢れ、興味深かったです。逆に火曜日夕方の大腸カンファレンスは大腸外科、肝臓外科、大腸内科、化学療法科、放射線科が参加し、徹底して一例一例の治療方針を話し合っていました。癌診療の中心を担う施設なので臨床研究やガイドラインに則ってカスケード通りに治療方針が決まっていくものと考えておりましたが、癌のステージだけでなく患者・家族背景、患者・家族の思い、これまでの治療歴、それぞれの診療科の考えなど様々なことを加味して決まっていることに驚きました。また、できるだけ早い治療を提供することもがん研の売りとなっており、初診から検査を経て手術まで早い人で2週間というのに驚きました。手術は、腹腔鏡下結腸切除術、超低位前方切除術、ISR、TaTME、側方郭清、骨盤内臓全摘術、ロボット支援下直腸切除術、バリエーション豊富でそのすべてがスピード、精度共に想像を上回るもので、毎日目を皿のようにして可能な限り手術見学させていただきました。イージーケースが少なく、肥満症例や手術既往、合併症、放射線化学療法後など困難症例が多いと感じました。そして狭い視野や層の識別困難な症例であっても腫瘍学的にきちんと切除することはもちろん、まるでイージーケースだったかのように手術時間が短いことに毎回驚かされました。麻酔科の先生がおっしゃっていましたが、手術室はoperating theaterであると、そのことを実感する1カ月でありました。

レジデントを中心にスタッフと密に連携した細やかな病棟管理も勉強になりました。トラブルへの対応の速さ、他科との連携、多忙にも関わらずベッドサイドに何度も足を運ぶ姿勢、医師11年目で臨床の大切さを再認識しました。ハイボリュームセンターの陰には合併症を出来るだけ少なくする徹底した病

棟管理があったわけです。

最後に、1カ月間お忙しい中、多くのことを教えていただき、また惜しみなく全ての手術を見せたいただいた上野雅資部長をはじめ大腸外科スタッフの先生方、コーディネートしてくださった渡邊雅之部長、そしてざっくばらんに様々なことを手取り足取り教えていただき、時には食事や懇親会に連れて行ってくださったレジデントのみなさん、心より感謝申し上げます。また留守中一人少ない人員でご迷惑をおかけしましたが、快く送り出してくれた鹿児島大学病院の先生方にも感謝申し上げます。誠にありがとうございました。